

令和元年6月28日現在

機関番号：31204

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11474

研究課題名(和文) 若年認知症家族介護者の健康支援に関する看護技術開発

研究課題名(英文) Development of nursing care techniques for supporting family caregivers' health of early-onset dementia patients

研究代表者

勝野 とわ子 (Katsuno, Towako)

岩手保健医療大学・看護学部・教授

研究者番号：60322351

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：若年認知症者と家族介護者へのケアについては、現在も課題が多く指摘されている。本研究は、若年認知症家族介護者の健康障害の深刻さに焦点をあて、介護者の健康を支援する看護技術の開発を目指した。

若年認知症家族介護者を対象とした質的研究から、ストレス源として「被介護者のBPSD」「認知症の病状」「被介護者のADL低下」「社会・経済的問題」「サービス利用の拒否」「介護者の加齢による衰えや健康悪化」などが抽出された。若年認知症エキスパートを対象とした研究からは、有効な看護ケア技術として「関係の構築」「繋ぐケア」「聞くケア」「待つケア」「自ら動くことを支えるケア」などが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、若年認知症家族介護者が経験しているストレス源と健康を支援する具体的なケア技術を明らかにしたことに意義がある。また、この研究成果は家族介護者の身体的・精神的健康の維持・向上に資するとともに、保健医療福祉関係学生への家族支援技術教育、若年認知症者のケアに従事する看護専門職者への健康教育プログラムの質の向上に資するといえる。

研究成果の概要(英文)：There are many unsolved issues regarding care for persons with early-onset dementia and their family caregivers. This study aimed to develop care techniques for this population by focusing on seriousness of health deterioration of family caregivers for persons with early-onset dementia. Qualitative studies on family caregivers identified stressful events such as BPSD, symptoms of dementia, decline of ADL, socio-economic problems, refusal of service use, frailty and deterioration of health of family caregivers, etc. A study on nurse experts for early-onset dementia revealed effective care techniques such as building close relationship with family caregivers, care of connecting, care of listening, care of waiting, supporting moving forward by themselves, etc.

研究分野：認知症ケア

キーワード：若年認知症 家族介護者 健康支援 ストレス

1. 研究開始当初の背景

2009年3月に厚生労働省が発表した「若年性認知症の実態に関する調査結果の概要（主任研究者：朝田隆）」によると全国の若年性認知症者数は37,800人と推計され、推定発症年齢は平均51.3歳であった。高齢期に発症する認知症者と異なり、働き盛りの成人期に発症する若年認知症者と家族介護者は認知症による心理的、社会的、経済的影響が大きいことが知られている。研究代表者らは、過去に若年認知症家族介護者の健康に関するサポートニーズを調査し（Katsuno,2011）、その結果、殆どの介護者が身体的精神的な症状を経験していること、約7割が自分の健康状態が悪くても医療機関を受診していないことが明らかになった。また、約8割の介護者が抑うつ状態を経験していたが受診していたのは15%にとどまっていることが明らかになった。さらに、殆どの介護者が介護に何らかのストレスを感じ、ストレスを「非常に感じている」介護者が約5人に1人おり介護者の健康リスクが高いことが推察された。今日まで、進行性の疾患と共に生きる認知症者への介護生活の中で生ずる介護者の身体的・心理的ストレスの内容と対処行動、さらに介護者のストレス軽減のための看護支援内容と方法を継続的に検討した研究はない。

2. 研究の目的

本研究は、若年認知症者を介護する家族介護者の健康を支援する看護技術を開発することを目的とした。具体的目標は下記の通りである。

- 1) 進行性の疾患と共に生きる若年認知症者への介護生活の中で生ずる家族介護者の身体的・心理的ストレスの内容と有効な看護支援内容を明らかにする。
- 2) 若年認知症家族介護者のストレス軽減のための看護支援について、内容と方法を継続的に検討し看護ケア技術を開発する。

3. 研究の方法

(1) 若年認知症家族介護者ケアに関する文献検討

国内の66文献を対象として、若年認知症家族介護者ケアの動向を質的に分析した。

(2) 若年認知症家族介護者の健康の推移と在宅介護継続の有無に関する研究

目的

若年認知症者を介護する家族介護者の長期的健康の推移と在宅介護継続の視点から評価し検討することを目的とした。

研究デザイン

質的記述的研究デザイン

対象者

若年認知症者をケアしている家族介護者

データ収集法

家族介護者の健康評価指標として、介護負担感、うつ状態、QOL、ADLなどを用いた。在宅介護継続については、評価時点での在宅介護継続の有無とした。評価はベースライン、2年後、3年後に行った。

データ分析方法

3年間に渡る評価に用いた測定具の得点の推移と在宅介護継続の有無から特徴を記述した。

(3) 若年認知症家族介護者の身体的・心理的ストレスと対処行動に関する研究

1) 若年認知症の配偶者とともに生きる家族の経験に関する研究

目的

若年認知症の配偶者を介護する家族介護者の認知症診断前からの人生の経験（ups and downs）を経時的に記述し理解することを目的とした。

研究デザイン

質的記述的研究デザイン

研究対象者

若年認知症者を介護する家族介護者

データ収集法

人生の経験の測定具は「人生のups & downsインタビュー評価ツール」を用いた。さらに、介護負担尺度、うつ自己評価尺度、主観的QOL評価スケールを用いて心理的評価を行った。質的データはインタビューガイドを用いた半構成的面接法によって収集した。インタビュー時間は60~90分。インタビューの内容は認知症診断からインタビュー時まで経験している介護経験および生活の質、ストレスフルな出来事などについてであった。

データ分析法

質的データは、録音したデータを逐語録に起こし、KnafIのアプローチをもとに内容分析をもちいて分析した。量的データは数値とパターンに着目して分析した。

(4) 若年認知症者および家族介護者支援におけるエキスパートへの面接調査

1) 若年認知症者と介護家族を支えるケアに関する研究～ケア技術とそれを支えるもの 目的

65歳未満で発症する若年認知症者と介護家族は、身体的、精神・心理的、社会・経済的に大きな影響を受けることが指摘されている。本研究は、特に、不安やストレスが高い時期と言われている認知症診断の前後に行われているケアを記述し理解することを目的とした。

研究デザイン

質的記述的デザイン

研究対象者

認知症診断前後の若年認知症者および介護家族を支援した経験をもつエキスパートの看護職者

データ収集方法

インタビューガイドに基づく半構成的面接法を用いて個室などプライバシーが保たれる場所で個別にインタビューを実施した。インタビュー時間は約90分。

データ分析方法

Knaflのアプローチをもとに内容分析を用いて分析した。

4. 研究成果

(1) 若年認知症家族介護者ケアに関する文献検討

若年認知症家族介護者ケアの動向を質的に分析した。その結果、ケアの場によるケア内容の違いが示唆された。家族が在宅で介護する生活を支援する支援内容としては、【介護負担に対する支援内容と時期】【多職種連携】【家族会】【アセスメントツール】などが抽出された。若年認知症者が病院や施設へ入院・入所している家族介護者への支援内容は【退院支援】のみであった。ケアの場の違いを考慮した若年認知症者をケアする家族介護者ケアの内容と方法に関するケア研究の充実が課題といえる。

(2) 若年認知症家族介護者の健康の推移と在宅介護継続の有無に関する研究

研究参加者は4名。女性2名と男性2名。被介護者との関係は、全員が配偶者で介護の場は全員が評価初年度は在宅であった。被介護者の診断名は全員アルツハイマー型認知症で介護サービスを利用していった。3年後に在宅介護を継続していたのは2名(A氏、B氏)。A氏の特徴としては、時間の経過とともに介護負担感が減少していたが、うつ状態は増加傾向にあった。また、ADLもかなり低下していたが、主観的QOLが介護者および被介護者とも向上していた。B氏の特徴としては、介護負担感の減少がみられ、被介護者の主観的QOLが高い状態で維持されていた。一方、3年後に医療機関へ移行したC氏の特徴としては、介護負担感の増加および被介護者のADLの低下が見られた。高齢者施設へ移行したD氏の特徴としては介護負担感の顕著な増加がみられた。本研究の結果から、若年認知症者の在宅介護継続のための要因として家族介護者の介護負担感が示唆された。また、家族介護者の健康を支援するためには、介護負担感のみならず、被介護者のADLおよび主観的QOLのモニタリングも重要であることが示唆された。

(3) 若年認知症家族介護者の身体的・心理的ストレスと対処行動に関する研究

1) 若年認知症の配偶者とともに生きる家族の経験に関する研究

研究参加者は女性11名と男性3名、平均年齢は62.9(SD6.6)であった。被介護者の認知症診断名は、AD10名、FTD4名で、介護の場は、在宅9名、グループホーム3名、特別養護老人ホーム1名、医療機関1名であった。若年認知症家族介護者の人生の満足度が低下するストレスフルなイベントは、「被介護者のBPSD」「病状」「サービス利用の拒否」「ADL低下」「社会・経済的な問題」「加齢による衰えや健康悪化」「家族の状況」が抽出された。また、介護生活の中で人生の満足度が向上するイベントとして、「被介護者の病状安定化」「経済・社会的な安定」「介護経験の積み重ねによる自信」「社会的なサポート」「家族の絆の深まり」「健康」が抽出された。人生の満足度の最低得点についてみると「認知症診断時」が最も多かった。本研究の結果から、若年認知症の配偶者と共に生きる家族介護者のQOLと健康をさせるためには、診断前から、未来を視野に入れたケアを継続的にマネジメントしていく事、診断時の衝撃の緩和、症状の悪化の予防、症状悪化に対する心の準備の整え、症状悪化時の対応、在宅でのサービス利用の工夫、経済的不安に対する対応などが重要であることが示唆された。

(4) 若年認知症者および家族介護者支援におけるエキスパートへの面接調査

1) 若年認知症者と介護家族を支えるケアに関する研究～ケア技術とそれを支えるもの

参加者は、若年認知症者と家族介護者を支援した経験を持つエキスパート看護師 10 名。データの質的分析の結果、【関係性の構築】、【繋ぐケア】、【聴くケア】、【待つケア】、【自ら動くことを支えるケア】、【寄り添うケア】、【経済的な支援】などのカテゴリーが抽出された。関係性の構築には関係性の必要性の認識、支援の基盤、本人と家族は一体、が含まれ、繋ぐケアには、気配りと声かけ、フットワークの良さ、次の人生を生きる、本人・家族と支援者、家族の関係性、地域の多職種資源、学校関係者が含まれた。聞くケアには、相談、介護者が話したいこと、当事者が話したいこと、いつでも頼れる誰かがいるメッセージ、待つケアには、病気の受け入れに要する時を予測、自ら動くことを支えるケアには若い当事者と家族には動ける力がある信頼、寄り添うケアには、一人で動けるかのアセスメント、動くことを後押しする付き添うケア、経済的支援には、諸制度と資源の説明と手続きへの支援、仕事のしまい方への支援などが含まれた。本研究の結果から、認知症診断前後の介入には、特にケアが成立する前の「関係性の構築」、さらにそこから「繋ぐケア」、そして病気の受け入れには時間がかかることを予測し本人と家族の悲しみ、絶望、心配などに寄り添いながら経済的問題への対応、当事者と家族が新たな人生を歩むための関係性や場の創出のために現実的に行動していくケアが不可欠であることが示されたといえる。さらに、若年認知症者の介護家族は 50 代、60 代の方が多く潜在能力が高いこと、また、本人も診断前後には思考し判断し、他者に伝えることが可能であることを考慮にいたったケアの重要性が示唆された。

<文献>

Towako Katusno, Mikiko Aoyama, Shin Otomo, Kazuo Miyanaga, Support needs for family caregivers of persons with early-onset dementia in Japan, 10th International Conference, p192, 2011

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 5 件)

勝野 とわ子、出貝 裕子、末永 裕代、青山 美紀子、菅野 裕佳子、河原 加代子、若年認知症家族介護者の健康の推移と在宅介護継続の関連：介護負担感、うつ、QOL の視点から、第 36 回日本看護科学学会学術集会、2016

木舟 雅子、宮永 和夫、比留間 ちづ子、小山 恵子、勝野 とわ子、他、若年認知症専門員研修事業について、日本認知症ケア学会大会、2016

Towako Katsuno, Experiences of family caregivers of persons with early-onset dementia in Japan, Alzheimer's Association International Conference, 2017

青山 美紀子、勝野 とわ子、若年認知症に関する研究動向と課題、第 38 回日本看護科学学会学術集会、2018

森 優貴乃、勝野 とわ子、急性期病院における認知機能低下高齢者へ対する看護実践と関連する要因の検討、第 38 回日本看護科学学会学術集会、2018

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：河原 加代子
ローマ字氏名：KAWAHARA Kayoko
所属研究機関名：首都大学東京
部局名：人間健康科学研究科
職名：教授
研究者番号（8桁）：30249172

研究分担者氏名：出貝 裕子
ローマ字氏名：DEGAI Yuko
所属研究機関名：宮城大学
部局名：看護学部
職名：准教授
研究者番号（8桁）：40315552

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。